

発掘コラム《平安・縄文時代の遺構》秦野市 No.125 遺跡（仮称）三廻部東耕地遺跡

今回の発掘調査では、三廻部地区ではじめてとなる堅穴住居が2軒発見されたことが特筆される成果です。それぞれは約20m離れて位置し、いずれも正方形に近く、H1号堅穴住居の規模は、1辺



H1号堅穴住居（上がカマド）



H1号堅穴住居のカマド

約3.6m、深さ0.8mです。床面はやや起伏が見られますが、中央部付近は硬く踏み固められていました。カマドには石が組まれていることも特徴で、H1号堅穴住居のカマド燃焼部の側面には柱状の礫を使った袖石が3個ずつ立てられています。煙道部には甕形土器を3個体繋げた煙突が建物外側に延びています。出土した土器から9世紀代の建物であると考えられます。

縄文時代では、中期初頭の五領ヶ台式土器の破片が多く分布していることが明らかとなっています。



発掘作業風景

発掘コラム《近世～古代までの調査成果》秦野市 寺山角ヶ谷戸遺跡

寺山角ヶ谷戸遺跡は、小田急小田原線秦野駅から北へ約3km、ヤビツ峠を源流とする金目川の東に位置する秦野市寺山地区に所在し、標高205～213mの南北に延びる斜面上に位置します。遺跡の東側には、寺山中丸遺跡が所在し現在調査が行われています。調査は、2016(平成28)年3月から実施しています。



段切り石列（下段）



H1号堅穴住居

遺跡は、近世の開墾により斜面であったところが段切りされ、離壇状の地形を呈して上段と下段にわかっています。近世の遺構は上段に嵌状遺構と、後世に大きく削平を受けた下段に宝永火山灰の廃棄土坑、段切りなど耕作に関係する遺構が発見されました。段切りは溝の縁に人頭大の礫を並べており、類例が少ないものです。遺物は少量ですが、18世紀から19世紀の陶磁器、砥石、寛永通宝などが出土しています。

中世～古代では、円形や長方形に掘られた土坑を発見しました。円形の土坑は覆土中に木炭が多量に含まれているものとそうでないものがあり、用途の差が考えられます。その他、北側にカマドを持つ堅穴住居が1軒発見されました。



古代面全景（上段）

発掘コラム《希少な鉄製品・地すべりによって変形した住居》秦野市 柳川竹上遺跡

秦野市の西部、上地区に所在する柳川竹上遺跡は小田急小田原線渋沢駅の北西方向へ約3kmの場所に位置しています。発掘調査をしている場所は、標高240mの丹沢山地裾部にあたり、川音川の支流である濁沢の左岸、南北に延びる尾根上のゆるやかな南向き斜面に立地しています。

中日本高速道路株式会社が計画する新東名高速道路建設に伴い、2015(平成27)年10月から調査を実施しています。これまで本格的な発掘調査が行われていなかった地区ですが、今回の調査において、縄文時代から江戸時代に至るまでの遺構や遺物が発見されました。



H2号堅穴住居



遺跡遠景（上が北）



平安時代では、堅穴住居が3軒見つかっています。そのうちの1軒からは、土師器の甕や壺と共に鉄製の鋤先と考えられるものが完形で出土しました。長さ21cm、幅約20cm、重さは約400gあります。木製の柄の先にはめ込んで使っていたことが想定されますが、柄部は残っていませんでした。鉄製品は大変貴重であり、鋤先が出土したのはこの遺跡では一例に限られます。また、再び鋳造することもあるため、完形で出土する例は少なく、極めて希少な資料です。J5号埋甕断面

縄文時代では、中期の堅穴住居や埋甕が発見されています。堅穴住居は地すべりの影響を受けて、壁や床が南北方向にずれている状況が確認できました。



J6号堅穴住居



地すべりの断面
※北に堆積していたローム層がすべり落ちて
黒色土の上に堆積した状況です

